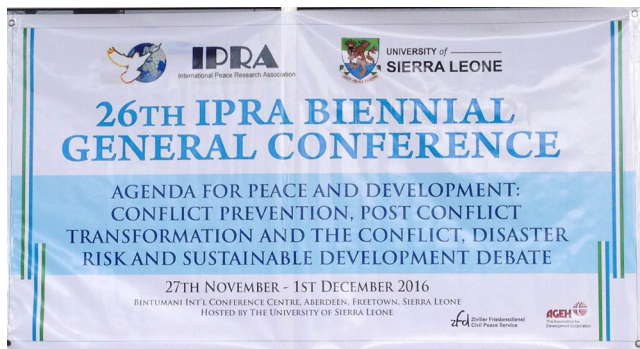


国際平和研究学会 (IPRA: International Peace Research Association) 2016 年大会参加報告

IPRA の 2016 年 (第 26 回) 大会はシエラレオネのフリータウンで開催された。以下はそれに参加した当学会会員 3 名の報告である。なお、報告をもらった児玉克哉会員は新体制の事務局長 (共同) に選出されており、次回 IPRA 大会はこの新体制のもとで開催される。新体制の理事等の一覧を報告の最後に添えてもらっているので参照されたい。



大会のバナー (提供・篠田英朗氏)

児玉克哉

「国際平和研究学会の動向」

第 26 回国際平和研究学会総会が 2016 年 11 月 27 日から 12 月 1 日まで、アフリカ、シエラレオネのフリータウンにて開催された。総合テーマは「平和と開発のアジェンダ～紛争予防、紛争後の変革、紛争と災害リスク、持続可能な開発のための討論」であった。会議には世界 50 カ国から 300 名弱の参加者があった。シエラレオネの交通不便さというハンディを考えるとかなりの数の参加者であった。実際に日本からは乗り継ぎなども入れると 40 時間程度かかる。空港からフリータウンの町までバスを使えば 4 時間くらいかかった。往復の移動だけで 4 日かかることになる。

シエラレオネでは 10 年以上も内戦が続き、まさに「平和の実現」が社会の最重要課題であった。こうした内戦により、最も平均寿命が短い国としても知られている。内戦が終わってからしばらく経ち、町は落ち着きを持つようになった。しかし 2015 年にはエボラが流行し、世界的なニュースになった。会議の開催も一時は危ぶまれたが、エボラも今年の 1 月には終息宣言され、シエラレオネは内戦とエボラからの「復興」の過程にある。やっと訪れた「平和」のもとで、新たな発展を模索するシエラレオネでの会議となった。

日本からは 6 名の研究者が参加していた。いつもならもう少し多いのだが、地理的なことと時期からして仕方ないところだ。

1. 平和構築、人間の安全保障、開発

シエラレオネという内戦とエボラに苦しめられた国での開催であり、やはり平和構築や人間の安全保障に関心が向けられた。会議を通じて、災害リスクの対応、保健衛生、インフラの構築などが話された感がある。紛争の後にいかにして社会構築をしていくのかは非常に重要な課題である。これがうまくできなければ、また紛争の火種が出てくることになる。この点においてはアフリカは多くの成功とさらに多くの失敗の事例を持っている。ここから学び、今後に生かすことが必要である。私は第一全体会で Conscientious Development (良心の開発) のコンセプトを提示した。Sustainable Development (持続可能な開発) がこれまで目標とされてきた。しかし、開発や環境問題における「持続可能性」の問題は、その方向性の問題をクローズアップさせて、文化や思想の問題に深く関わることにならざるを得ない。つまり、開発の程度 (レベル) の問題だけでなく、「幸せ感」「全体の発展・繁栄」などをコンセプトにした開発の方向性 (ベクトル) が問題視されるのである。自然と労働力を踏み台にし、人間としての豊かな感性まで見捨てて物質主義第一となっていたのが従来の開発だ。持続可能な開発はそうしたあり方に疑問を呈し、バランスをとりながらの「開発」の提起である。内戦と伝染病、貧困に喘いできたシエラレオネはこれからの「開発」のあり方を考えるのにふさわしい場所であった。

2. 環境破壊と災害の脅威

この会議で注目されたのは環境破壊や災害と平和の関係であった。エコロジーと平和コミッションが活発であるだけでなく、全体会においても重要なテーマとなっていた。環境研究はその専門の学会でも研究が進められている。IPRA において特徴とされるのは、環境破壊と紛争や難民・強制移住者などとの関連の研究である。難民や強制移住者の問題は以前は「政治的な抑圧」との関係で捉えられてきた。今もその視点は重要である。しかし、環境の変化から早ばつ・砂漠化や大洪水などが起き、ほぼ強制的に移住しなければならない人が急増している。また水資源など環境に関わる資源の争奪も行われ、紛争の一要因になっている。政治的難民と環境変化や貧困による移住とが絡みながら起

きているのだ。特にアフリカは、現在、人口爆発が起きつつある。そして、地球温暖化などの影響で、水不足やそれによる食糧不足が脅威となってきている。ヨーロッパへ向かう人の波が形成されているのだ。紛争—抑圧—環境破壊—貧困—災害などの連関を注意深くみていかなければ、現代の課題は解き明かされない。IPRAはこの現代的な課題に真正面から取り組んでいこうとしている。

3. メディア、文化と平和

メディアやジャーナリズムと平和の問題も活発に議論された。IPRAには「メディア、紛争、人権」コミッションや「平和文化とコミュニケーション」コミッション、「宗教、精神性と平和」コミッション、「平和とツーリズム」コミッションなど関連のコミッションが設置されている。そのどれもが、本会議において活発であった。メディア・ジャーナリズムにおいては、アメリカ大統領選挙でのメディアの動向や効果などが議論された。SNSなどの効果も議論された。トランプ氏の大統領選の勝利は特にアメリカからの参加者には大きな関心と衝撃があったようだ。これからのアメリカの国内・海外での政策に不安の声が聞かれた。

宗教や精神性と平和の問題もクローズアップされていた。イスラム教とキリスト教など宗教間の寛容と反発は、これからの世界の平和において非常に大きなポイントになる。どのように宗教観対話をすすめることができるのか。平和学の実践性が問われる課題だ。

4. 新たな体制で

会議の終盤に総会が開催された。選挙の結果、新事務局長に、児玉克哉とメキシコのウスラ・オズワルド教授が選出された。平和学の実践性を発揮して、平和学が象牙の塔に閉じこもるのではなく、現実の世界を変える研究として地位を高めることが望まれる。そのためにも資金の獲得や事務局体制の確立が必要だ。

事務局は、トルコのサカリヤ大学にそのまま維持することになった。まだパーマナント事務局とはいえないが、大学とそうしたことも含めて交渉していく。前事務局長のネスリン・ケナー氏の大学であるとともに、児玉も客員教授をサカリヤ大学で務める。毎回、事務局が移動し、その度に混乱が生じていたが、事務局の安定につながることを期待される。

また今回の会議には世界銀行からの支援もあったし、中国の企業家などからの支援もあった。彼らは継続した支援を示唆しており、IPRAの安定した運営が展望される。実践的なGlobal Initiativesも立ち上げる予定である。「環境と開発」「難民と平和」「核兵器軍縮／ヒロシマ・ナガサキプロセス」など実践性があり、研究費獲得の有望なプロジェ

クトが予定されている。

なお、理事会や各地域研究会の体制は以下のとおりとなった。★

事務局長

児玉克哉 Katsuya Kodama (Japan) ウスラ・オズワルド Ursula Oswald (Mexico)

理事

アフリカ

Mahfouz A. Adedimeji (Nigeria)
Christine Atieno (Kenya)
Abosedede Omowumi Babatunde (Nigeria)
Khalil A. Elmedani (Sudan)

アジア・太平洋

Kelli Te Maiharoa (New Zealand)
Sri Nuryanti (Indonesia)
Rajib Timalisina (Nepal)
Senthan Sei. Varjah (Sri Lanka/UK)

ヨーロッパ

Hans Günter Brauch (Germany)
Martina Fischer (Germany)
Nesrin Kenar (Turkey)
Unto Vesa (Finland)

ラテンアメリカ

Marcos Alan S. V Ferreira (Brazil)
Irene Giovanni (Colombia)
Maria Teresa Munoz (Argentine)
Esteban A. Ramos Muslera (Honduras)

北アメリカ

Linda Groff (USA)
Wim Laven (USA)
Matt Meyer (USA)
Cris Toffolo (USA)

ロシア・旧東ヨーロッパ

Vladimir Sotnikov (Russia)
Olga Vorkunova (Russia)

アフリカ平和研究・教育協議会

Khalil A. Elmedani (Sudan/UAE)

アジア・太平洋平和研究学会

Janjira Sombatpooniri (Thailand)
Pradeep Dhakal (Nepal)

ヨーロッパ平和研究学会

Itir Toksoz (Turkey)

ラテンアメリカ平和研究協議会

S. Eréndira Serrano Oswald (Mexico)

アメリカ平和と正義研究学会

Nurana Rajabova (USA/ Azerbaijan)

国際平和研究財団

Diana de la Rua (Argentina)

篠田英朗（東京外国語大学）〔文・写真とも〕
「IPRA2016 年大会に参加して」

2016年11月27日から12月1日にかけてシエラレオネの首都フリータウンで開催されたIPRA（International Peace Research Association）2016年大会に参加した。IPRAは二年に一度しか大会を開かないため、世界各国の平和研究者と交流を深めるためには、大会参加は非常に貴重な機会である。今回も様々な国々から様々な専門を持つ研究者たちが集まっており、非常に刺激的な大会であった。

今回の大会の最大の特徴は、1990年代に凄惨な内戦を経験した後、国連の大々的な平和維持活動をはじめとする国際的な支援を受けながら、紛争後平和構築・復興開発のプロセスを着実に歩んできているシエラレオネで開催されたことであろう。私自身、平和構築を専門にしているため、シエラレオネには過去10年間余りの間に何度も足を運んでいた。そのため、今回のIPRA大会開催には感銘を受けるものがあった。

IPRA大会がシエラレオネで開催されるようになったのは、シエラレオネ人であるイブラヒム・ショー教授（Northumbria University, UK）をはじめとする現執行部の指導力が大きかっただろう。同時に、現地で受け入れ態勢を整えたメムナツ・プラット教授をはじめとするシエラレオネ大学フォラベイ大学平和紛争学部の努力も大きかったと言える。

シエラレオネは、一人当たりGDPが696ドル、人間開発指標で188カ国中171位（2015年）のまぎれもない発展途上国である。近年は堅実な経済成長率を見せてはいたが、リベリアとともにエボラ出血熱による混乱の渦中に陥って、社会の様々な側面で停滞を余儀なくされたことの影響もまだ残っている。

こうした国では、インフラ整備の度合いが、先進国の人間の常識では通用しないレベルにある。会議運営のノウハウを持つ人的資源も乏しいと言わざるを得ない。そして社



会全体の文化的雰囲気、たとえば時間厳守の感覚などが、大きく異なる。この国で世界各国から何百人もの雑多な人々が集まる国際会議を運営するなどというのは、気が遠くなるような試みであったに違いない。IPRA大会をシエラレオネで開催することに大きな意義を見出し、多大な努力を払った方々に、敬意を表したい。

フリータウンの空港では、メムナツ教授らのシエラレオネ政府への働きかけにより、学会側が手配した事前ビザで入国できる仕組みが整えられていた。日本を含む世界のほとんどの国でシエラレオネは大使館を持っていないので、本来であれば各人がそれなりの労力を払って進めなければならない作業であったため、ビザ手配は大変に重要な要素だ。ただ、それでも、空港では、いきなり審査カウンター付近をうろろしている謎の男に謎の「追加手続き料」なるものを要求された。シエラレオネのような国では、この手の場面に何度も遭遇する。うまく振り払わなければならないので、気を遣う。汚職対策は、紛争終了後の15年ほどの間で進んでいないわけではないが、まだ先進国の常識からはかけ離れたレベルにあるのは確かだ。

空港を出ると、学会が手配してくれていたはずのバスが来ていないことが判明した。そもそも出発していないので、「待っても無意味だ」、とやはり謎の男から、同じ飛行機で到着した10名ほどのIPRA関係者に説明があった。と今度は謎の男が複数名、別方面から現れ、ボートタクシーの手配方法について、言い争いを始めた。あまり深いことは気にしないようにして、市内行の現実的には唯一の手段であるボートに乗り込むチケットを買った。車で行けば、6時間といった時間がかかる道のりである。なぜ空港がこのような不便でへんぴなところにあるのかということは、戦争前のシエラレオネの政治情勢にもからむ興味深い点なのだが、それは言っても仕方がない。ヘリコプターの交通路もあったが、何度も墜落して犠牲者を出したため、今は廃止されている。

学会が開催されたビントマニ・ホテルは、外国人向けホテルが密集しているアバディーン地区にある。私を含めて大会参加者の多くはアバディーンの中のホテルに泊まっていたようだ。乗り合いタクシーバスがないわけではないが、普通の意味での公共交通手段のようなものはないので、学会が各ホテルを回る大型バスを手配してくれていた。ただ何時に来るのかよくわからない感じだったので、私は利用しなかった。

ビントマニ・ホテルには、中国系資本による建設と思われる大きな会議場が併設されているため、大会はその会議場で開かれた。大きな会議を実施するには、この国ではここしかない、という場所であり、全体会議を開くためのホール部分の収容力には問題がなかったように思われる。大会



開会式は、中国企業関係者による中国語スピーチを含む何人もの方々のスピーチで数時間にも及んだ。シエラレオネ政府の副大統領が出席したため、武装した護衛や楽隊も現れる物々しさであった。学会としては違和感を覚えざるを得ないが、アフリカの紛争後国での開催だということを考えれば、政治的に高いレベルで IPRA 開催の意義を語ってもらうことは、やはり非常に重要なことであったのだろう。

IPRA では 24 の分科会にあたるコミッションがあるため、大会でも分科会の時間帯になると 10 以上のパネルが動くことになる。平和学の裾野の広さを感じることができる。私自身は自分の報告は、紛争解決のコミッション企画で行い、専門に近い紛争解決に関係した内容が発表されるパネルに参加することが多かったが、それでも教育や開発が語られるパネルに参加してみたりして、大会参加の醍醐味を味わった。

ただ、会議場には、大ホールと小部屋が一つずつしか存在していなかった。そのため多くのパネルがフロアの任意の場所に椅子を持ち寄るような形で行われた。目当てのパネルの開催「場所」を探し求めて、多くの参加者が右往左往していたのも、この大会のほほえましい特徴的な一コマであった。全体参加の共通議題パネルは、たいいてい 1 時間弱ほど遅れて開始された。開始定刻にホールに行く



と、壇上に誰もいないだけではなく、掃除機がかけられている最中であったこともあった。

そうした雑多な雰囲気は、ディナーパーティーなどの場合には、大きな楽しみになる。国籍の異なる参加者が、それぞれの出身国の歌をカラオケで歌ったり、アフリカの音楽を奏でるバンド演奏にあわせて皆で思い思いのやり方で踊ったりと、大変に心に残る機会であった。フリータウンを一日かけて回るツアーも、大変に盛沢山であった。

おそらく IPRA 以外に、シエラレオネで国際大会を開催しようとする学会は、ほかに存在しえないのではないかと。いろいろな興味深い場面もあったが、こういった挑戦をすることができる気性を持つ IPRA は、愛すべき学会であると、私は素直に感じた。★



今野泰三（中京大学国際教養学部、パレスチナ／イスラエル地域研究）

IPRA（国際平和研究学会）第 26 回大会参加報告

IPRA（国際平和研究学会）第 26 回大会が、2016 年 11 月 27 日から 12 月 1 日までシエラレオネの首都フリータウンで開催されました。ホストは University of Sierra Leone で、英国の Northumbria University とトルコの Sakarya University が協力し、会場は Bintumani Conference Centre でした。今回の参加者は約 200 人だったそうです。前回のトルコ・イスタンブールで開催された第 25 回大会の参加者が約 1000 人だったのに対し、今回の参加者が約 200 人に留まったことには、アジアからのアクセスの難しさと、2 年前のシエラレオネでのエボラ出血熱の流行が関係していたと思われます。日本平和学会からは私を含め 5 名程度が参加しました。

大会テーマには、'Agenda for Peace and Development'（平和と開発のためのアジェンダ）が掲げられ、全大会、分科会（芸術と平和、紛争解決と平和構築、生態系と平和、ジェンダーと平和、メディアと紛争と人権、非暴力と平和



会場から眺めたフリータウンの全景。手前の湾内にスラムが見える

運動、人権と人間の安全保障、和平交渉と仲介、内戦、先住民、平和教育、平和のジャーナリズム、平和理論、平和のツーリズム、グローバル政治経済、平和の文化とコミュニケーション、移住と平和、平和と安全保障と開発、和解と移行期正義、宗教と精神性と平和、若者と平和、世界銀行)等が開催されました。全体の参加者が少なかったため、全ての分科会が毎日開催されたわけではなく、1日だけの開催になった分科会もみられました。また、分科会の会場が直前まで掲示されなかったり、分科会の会場が何度も変更されたり、2つの分科会の会場が重なったり、大会会場に到着するまで発表時間が伝えられていないなど多くの混乱がありました。

アフリカのサハラ砂漠以南の地に足を踏み入れたのは初めてでしたが、「平和」を考えていく上で良い経験となりました。会場となったシエラレオネは、大会最終日のフリータウンでのフィールドツアーに同行した現地ガイドの方によると、英国の植民地だった時代には西アフリカ各地から奴隷が集められて船に乗せられる港町だったそうです。さらに、アメリカ独立戦争時に英国は奴隷を自軍に参加させるため戦後の解放を約束しました。そして、戦後、この約束を履行するためとして英国本国から放逐された奴隷によって建設された国がシエラレオネだということです。そうした経緯から、奴隷が解放されて作った国であることを国際社会に示すため、首都に「フリータウン」という名をつけたのだそうです。その後シエラレオネでは、1992年から2002年まで、隣国リベリアでの内戦の煽りを受けて激しい内戦が起り、人口の約1割にあたる70万人が亡くなりました。戦後は移行期正義という国際社会のプロセスに従い、戦争犯罪人を裁く国際法廷が国内に設置され、内戦で引き裂かれた社会の和解と融和にも力を入れてきました。国際援助を受けて経済発展も進みましたが、エボラ出血熱が流行したため多くの外国企業が撤退し、投資も激減して以来経済状況が戻っていないそうです。今回の大会



大会初日に演説を行う Victor Bockarie Foh 副大統領（一番右）

で発表したシエラレオネの研究者の多くが、内戦後の政治社会状況は脆弱な基盤の上にあり、人々に平和の恩恵を与えるためには開発と発展が急務であるとの危機感を表明していました。

そうした経緯からか、大会の開催初日にはシエラレオネの Victor Bockarie Foh 副大統領が来て演説を行いました。また、シエラレオネの経済開発で大きな存在感を持つ世界銀行や中国の組織が大会に資金援助もしていました。現地の大学関係者や企業経営者からも、今回の大会をバネに国際社会の中での地位を向上させ、経済発展につなげていきたいという強い思いを感じました。そうしたことから、シエラレオネのフリータウンは、「平和と開発」というテーマを考える学会の開催地として相応しい場所だったと思います。です。参加者200人程度というのはホストとしては少し残念だったかもしれません。もちろん、開発主義と平和が短絡的に結びつけられてしまうことで、シエラレオネの抱える諸問題が根本的には解決されていかない可能性もあります。そうした点から、世界銀行から国際平和学会の大会が資金援助を受けることの「政治性」が少し気になるところではありました。



会場となった Bintumani Hotel の駐車場に留められた中国政府関連の自動車



研究発表の様子

私個人は今回の大会では、'Effect of School and Community Health Program on Peace building in the De-developing East Jerusalem' と題する発表を行いました。この発表では、2016年までの4年間、国際協力NGOの日本国際ボランティアセンター（JVC）のスタッフとしてパレスチナ（ヨルダン川西岸地区、ガザ地区）で監督してきた学校・地域保健事業のモデルが、占領下で抑圧されたパレスチナ人青年たちの自尊心を高め、非暴力的な平和構築に寄与するものであったと論じました。分科会によっては発表者の方が聞き手よりも多いところもあったようですが、私の発表にはシエラレオネ大学の大学生を中心に約20人が参加し、パレスチナの現状やJVCが実施した事業に関してなど多くの質問が投げかけられました。紛争中もしくは紛争後の地域社会の復興と開発をどのように平和構築と結びつけていくかというテーマに対し、現地の大学生が高い関心を持っていることを知ることができ、とても良い学びの場となりました。

大会全体の感想としては、大会期間中は豪華な会場内に留まる時間が長く、現地のフィールドツアーが最終日の空港に向かうまでの数時間だけしかなかったため、内戦後の



首都フリータウンの博物館では、内戦後の和解の大切さを子どもたちに教えていた。

シエラレオネの状況をより深く理解する機会が少なかったのが残念でした。特に、世界の周辺に留め置かれている旧植民地の国では、首都に暮らすエリートと農村部や首都のスラムに暮らす民衆の間の格差や価値観の違いが「平和」と「開発」を考える上で鍵となることが長年指摘されてきました。そのため、ヨーロッパや日本などの中心国からシエラレオネのような周辺国に行っても、その首都の最高級ホテルに留まって学問的議論を繰り返しているだけでは（もちろんそうした学問的議論自体は意義深いものです）、世界の構造的暴力を経験し、問題の解決を考えていく上では十分ではありません。ただ少なくとも、今回の滞在を通じて、中国政府や中国企業がシエラレオネとの関係を深めている様子はとてもよくわかり、世界経済の動きに関して新たな視点を持つことができたのは良かったと思います（例えば、ダイヤモンド鉱山の経営権がエボラ出血熱大流行中に南アフリカの企業から中国企業に渡ったそうで、それ以外にも、町の至る所に中国語の看板を掲げた採石場や建設現場やレストランがありました。大会会場の Bintumani Hotel もシエラレオネ政府が経営権を中国企業に貸与しているとのことです）。また私個人は中東地域・アラブ世界に関心があるため、今回の大会で中東地域に関する発表が極端に少なかったのはやや残念でしたが、他方で、シエラレオネでは、工場経営者や商店経営者など資本を持つ階層がアラブ人、特にレバノンからの移住者で占められており、中東地域からの輸入品が至る所で売られていたことには強く関心を持ちました。

今回はまた、大会参加者が少なくアットホームな雰囲気だったため、発表の合間のコーヒブレイクに、世界各地から参加した研究者と面識を深め、情報を交換する機会に多く恵まれました。初めてのIRPA大会で、かつ西アフリカ諸国に関する発表や理論的な発表が多かったので内容を理解するには苦労しましたが、アフリカにおける暴力とジェンダーの問題をフィールドワークや当事者への聞き取りから分析した堅実で実践的な発表があったりと、全体としては大変充実した時間を過ごすことができました。★



休日にフリータウンのビーチで遊ぶ地元の青年たち